



医療スタッフのページ

私たちの身の回りにおける放射線

放射線技師 坂本 享久

日本人は、放射線や放射能といった言葉に非常に敏感です。「原発＝放射能」といったイメージもあるようです。病院では、レントゲン写真、CT、RI、放射線治療、マンモグラフィー、胃のバリウム検査、歯の写真、骨密度等、すべて放射線を使っています。これらの検査をした場合、必ず放射線を浴びることになります。では、病院に来なければ放射線を浴びることはないのでしょうか？ 原発事故に遭遇しなければ放射線を浴びることはないのでしょうか？ 答えは、NO です。

一般に放射線は、人工放射線と自然放射線に分けることができます。

人工放射線とは、私達人間の生活に役立てるために放射線発生装置などで人工的に作られた放射線をいいます。病院ではこの人工放射線を利用しています。

自然放射線とは、「自然界にある放射線」のことで地球が誕生したときから存在しており、私たちは自然界から常にこの放射線を浴びて生活しています。一つ目は、大地からの放射線です。岩石や土に含まれるカリウム40・ウラン・トリウムなどの放射性物質から放射線が出ています。二つ目には、宇宙から地球上に降り注ぐ

放射線で、宇宙線と言います。宇宙線は高度が高くなると量も多くなり、東京ーニューヨーク間を飛行機で1往復すると、地上で一年間に浴びる宇宙線の半量を浴びることと同じになります。三つ目は、食物からの放射線です。食物には、カリウム40という放射性物質が含まれています。四つ目は、空気中に含まれる放射性物質からの放射線です。岩石や土に含まれるラジウム等の物質から生じた気体状の放射性物質が空気中には存在します。こように、普段何気なく生活していても、また、病院に行かなくても、非常に少ない量ですが自然界からの放射線を体全体に受けて日々を送っているわけです。その放射線の量は、世界平均で1年間に2.4ミリシーベルトです(胸部正面写真1枚撮ると約0.05ミリシーベルト、胸部CT一回で約4ミリシーベルトの被爆(胸部のみ)があります)。

このように私達は、絶えず放射線を受けて生活しています。病院で受ける放射線もこの自然放射線と何も変わりはありません。病院の場合、放射線の量がきちんと管理されていますので不安な方は一度放射線科までご連絡ください。



病院ボランティア 「四つ葉のクローバーの会」のページ

~~~~~ 新病院へさらなる期待 ~~~~~

藤井裕子

遠くから見るとホテルのように聳える中部ろうさい病院。バス停からの道も桜若葉の木々、芝生、歩を運ぶにも緑が目によさしい季節です。素的な病院に様変わりをしました。医療・治療も今はすばらしく進歩しています。六〇才代に入るとほとんどの方が病院へと足を運ぶことが多くなります。

十年程、ボランティアとして外来の玄関で案内に付ってきました。いろいろと教えてもらうことが多く健常者であるが故に気がつかないことばかりですが、時折、心の変化、身体の変化を垣間見ることもあります。最近は患者さんの方から親しく声をかけて下さる方もあります。「病院がきれいになりましたね」の会話から、少しずつ心の内の話をされます。医療者に対する感謝、そして不満、病院に対する気づき等々話をされると、ほっとされ^え笑みに変わると私自身も、この「場」に居ることに感謝の気持ちへと導かれます。

三年前に八十八才の姑が胃ガンの手術を受けました。家族には余命告知も受け私達はホスピスか手術かと迷いを感じていましたが、姑はしっかりと自分の意思を持ち手術を望みました。

「先生のお母様ならどうされますか」と私の問いに先生は、「私の母が望むならします」との言葉に家族の心も決まりました。姑も先生を信頼し「命」を託しました。夏祭、そして楽しいお正月も孫・曾孫と迎えられましたが、術後十ヶ月して再度の入院となり、主治医から、「いつ、お別れがあっても不思議ではないです」との重い言葉となり、残りの時間を大切に過ごしました。終末となり意識のなくなる寸前に姑が、「〇先生にお会い出来てうれしかった 先生ありがとう。会えてよかった」「僕も、会えてよかった。よく頑張ったね」という会話が、姑と先生と間に残されました。家族はこの言葉に本当に心が癒されました。勿論ナースの方々も本当によく助けて下さり、姑は、静かな眠りにつきました。

○先生、本当にありがとうございました。

私の友人がA医師に、終末医療を受けました。彼女はまだ若く、そして残してゆく家族の事がまだまだ心配であり、思い残すことが多く多くありました。彼女も、家族もA医師に出会ったことを心から感謝していることを入院中も何度も聞いておりました。A医師は彼女と家族のケアをと思いつつも、一日の業務で時間がなく、「どのようにケアをしてよいのか」、「そしてやりえなかった」というジレンマを深く語られましたことが胸に沁みています。

新病院に、緩和ケア病棟があったらと切に切に思います。ガン患者は五人に一人、いや三人に一人の時代です。

告知、悲嘆、喪失と次々と寄せくる不安。末期の患者は、肉体的、精神面にわたって、救いを求めています。終末期の最後の残りの日々を、信用し信頼ある医師の元で、よりよい治療を受けながら、心穏やかに過ごすことが出来る病院を求めます。

いつの日か、中部ろうさい病院にも、緩和ケア病棟が「夢」ることを改めて期待します。



◆お知らせ◆

新しい特定検診・特定保健指導が今年の4月から始まりました。ご希望の方は、当院勤労者予防医療センターへご相談下さい。

相談窓口：2階 勤労者予防医療センター 予約受付時間：月～金 8:15～17:00 電話番号：052-652-5511

自分の健康は自分で守りましょう

編集後記

今年4月の医療制度改革に対する意見が様々な分野で聞かれます。国民的関心も高いようです。改革の課題は、少子高齢化に尽きるようです。現在、約1200万人弱の75歳以上の人口は、2030年には2300万人に増えると予測されています。社会保障費の増加、高齢者を支える若年世代の人口減少など、日本の社会構造がかわりつつあるなかでは、医療、介護、年金問題のバランスの取り方も大きな課題と言えます。この様な変革は多くの議論が尽くされるべきな事は言を待たないと編集子は考えます。十分な議論が行われて、安心して医療介護が受けられ、また医療、介護サービスが提供できる新しい制度がつくられることを望んでやみません。

(K.K)